

令和 5 年 10 月 24 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02775

研究課題名（和文）論理的思考力・表現力育成のための幼小中連携・国際比較によるカリキュラム開発

研究課題名（英文）Curriculum development based on the cooperation between kindergarten, elementary school, and junior high school; and international comparison for the development of logical thinking and expressiveness

研究代表者

河野 順子（KAWANO, JUNNKO）

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号：80380989

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：台湾の研究者、実践者による幼小連携研究との共同研究を継続し、これまでの日本での幼小連携研究の成果との比較研究を行い、統合的分析による、論理的思考力・表現力のカリキュラムの整備を図った。具体的には、論理的思考力の育成のためのカリキュラム案の精緻化を図った。これまでの日本での論理的思考力の発達研究を基盤にしなが、台湾での調査、実験研究で得たデータを加えて、幼小の接続を重視した論理的思考力育成のための研究の精緻化を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は以下である。○実践科学として参与観察・実験調査・検証に基づく新規のカリキュラムを提案する点、国際比較による保幼小の発達段階を加味した論理的コミュニケーション能力を中核に、論理的思考力・表現力の教科ごとの独自性と教科間のつながりを明らかにしたカリキュラム案を提案する点、大学研究者による教科間連携、国際比較、保・幼・小の連携、教育委員会との連携による新たな研究システムとして提案する点、実践と理論の統合を図る点など、新しい実践科学的な教科教育学の研究を目指していることにおいて学術的である

研究成果の概要（英文）：To improve the curriculum plan to cultivate logical thinking and expression through integrated analysis, we continued the joint research with the preschools and elementary schools cooperation research by Taiwanese researchers and practitioners, and conducted a comparative research with the results of our preschools and elementary schools cooperation research in Japan.

Specifically, we aimed to refine the curriculum to foster logical thinking. Based on the research on the development of logical thinking ability in Japan so far, we added the data obtained from the survey and experimental research in Taiwan, and built the foundation for the research to develop logical thinking ability with an emphasis on the conjunction of preschools and elementary schools.

研究分野：国語教育

キーワード：論理的思考力 表現力 幼小中連携 国際比較 カリキュラム開発

## 1. 研究開始当初の背景

現在、社会構成主義を基盤とした学びのパラダイムの大転換が起こっている教育界において社会構成主義の理論を基盤にした授業改革は教育における必至の課題である。2017年度版学習指導要領の議論であるアクティブ・ラーニングの方法論による対話的な授業創りもこうした方向性の上に立脚した議論がなされている。こうした学習が深い学びとなるためには論理的思考力・表現力の育成が欠かせない。本研究では、社会構成主義を基盤としたカリキュラム開発と授業提案へ向けて、次の2点に着眼した研究を推進する。第1点目に、ヴィゴツキ - 理論を背景とした他者との相互作用を重視した学びを通じた論理的思考力・表現力の育成を可能にするカリキュラム開発を継続し、具体的な授業開発を行う。第2点目に、社会文化的アプローチ（ジェームス・V/ワーチ（1995）らの理論を基盤とする）から解明することを目的とする。現在、従来 of 学習・発達に関する生物学的成熟ないし制約に基づいた個人に焦点化した捉え方の学習理論の限界が指摘されている。そこで、幼・小・中を貫くコミュニケーションの形成過程と論理言語発達を促す要因を究明し、本研究で特別支援学級での研究成果と台湾との連携研究の成果も加味する。本研究で明らかにすることは以下の点である。(1)前科研で作成した幼・小・中に渡る論理的なコミュニケーション能力の発達系統案の精緻化を図る。(2)保幼・小に渡る論理的思考力・表現力を参与観察・実験調査を通して心理学や教育方法学の知見を取り入れながら、台湾の研究者・幼小現場との共同研究・比較研究を取り入れ、国際的視野から明らかにする。(3)(1)(2)で明らかになった論理的なコミュニケーション能力、論理的思考力・表現力を育成するためのカリキュラム案の精緻化とアクティブ・ラーニングによる授業開発を行う。(4)(1)(2)(3)の成果をもとにした教科間をつなぐ論理的思考力・表現力を明示したカリキュラムの提案。(5)(1)(2)(3)(4)を基盤にした保育園・幼稚園から中学3年生にかけての科学的なカリキュラム提案。

## 2. 研究の目的

現行学習指導要領が提示され、教育現場において、アクティブ・ラーニングという方法論が注目された。アクティブ・ラーニングの学びが形式化されては社会に生きる力の育成は難しい。ここには、思考力の育成が必要なのである。河野は平成23年度の科研から一貫して論理的思考力の育成を教科間連携・幼小中連携によって追究してきた。その結果、教科間を横断していく論理的思考力として根拠 理由付け 主張の三点を抽出し、その発達も明らかにしてきた。今回は特に幼小の連携を強化し、論理的思考力育成の発達をさらに明らかにすると共にアクティブ・ラーニングによる主体的・対話的な深い学びを実現する授業改革の視点を明確にした幼小・教科間連携による論理的思考力・表現力育成のカリキュラム案の整備と授業提案を行う。特に、PISA調査でも独自の成果をあげている台湾の幼小連携教育との比較研究から新たな知見を見出す。

## 3. 研究の方法

まず、1点目に、社会構成主義を基盤とした「学び」観による保幼小連携に力点をのいた論理的コミュニケーション能力育成のためのカリキュラム案の精緻化をすすめる。2点目

に、教科の独自性を盛り込んだアクティブ・ラーニングによる授業実現のための論理的思考力・表現力育成のための教材開発、授業デザインを盛り込んだ論理的思考力・表現力育成のための授業開発を行う。3点目に、2点目の成果の台湾と日本との比較研究の成果を加味した統合的分析による論理的思考力・表現力の育成のための教科横断的カリキュラムの開発と提案を行う。4点目に、1～3の成果を拡充し、児童生徒の発達段階を加味し、保幼小(中)を貫く論理的思考力・表現力育成のための総合的カリキュラムを開発し、提案する。

#### 4. 研究成果

論理的思考力の育成について、幼稚園教育において、台湾の研究者との連携研究を行い論理的思考力の育成に成果をあげている東京都 H 幼稚園、及び台湾の A 幼稚園への参与観察を経て、次のような点が明らかとなった。双方の教員への聞き取りで明らかになったことは、論理的思考力育成のために、幼児教育においては、コミュニケーション能力育成を他者との関係性を築くことから始めていることである。特に、前回科研でも述べたが、他者と自己をつなぐために理由を伝え、聞き合う関係性を重視している。さらに、身体を通して論理的思考力の育成が身についていくような動作化などが有効に活用されていることは特筆すべき点である。また、幼児に对面で行った論理的思考力の発達調査では、鳥と嘴の関係を捉えるために、身体に刻まれた経験によって、幼児が動作化しながらその論理的关系を捉えようとしているところも重要な点であると考えられる。

さらに、今回の科研の研究において、これまで本研究で中核理論として取り入れてきた「根拠 理由づけー主張」の「3点セット」をもとに、鹿児島、熊本、京都、東京、山梨、秋田県の小学校、中学校、高等学校（特別支援教育）の実践を取り上げ、「3点セット」の発達研究、カリキュラム研究のまとめとしての著書を公刊（2023.9）において、研究の総まとめとする。ここでは、小学校1年生の説明的文章、文学的文章、2年生の文学的文章、3年生の説明的文章、文学的文章、5年生の説明的文章、6年生の作文指導、中学校1年生の古典の学習、3年生「話すこと・聞くこと」学習、高等学校の特別支援学級での文学的文章の学びにおいて、「3点セット」を活用した実践を提示した。これらの実践で3点セットを活用の実際、課題設定のありかた、他教科との関連、教材と教材の学びをつなぐ3点セットの育成の在り方など、カリキュラムとして活用することも、また、本書に載せられている各実践者が提示くださっているプロトコルからその発達のあり様を見ていただくこともできる。大切だったのは理由付けにそれぞれの児童・生徒の生活経験が引き出されていくことである。生活経験がそれぞれの児童生徒の生活体験を引き起こし、そこに共感が引き出されて対話が生み出されていったのである。

また、アクティブ・ラーニングによる授業の可能性として国語科が取り組んできた「批評読みとその交流」について、小学校から中学校へ向けての授業の実績を積み重ねてきて、児童生徒の発達論のうえからカリキュラムの整備ができたことも成果として大きかった。その概略は以下の通りである。低学年...既有知識や経験と本文とのズレから疑問をもとに批評読みへと展開する。中学年...論理展開についての批評読みへと展開する。高学年・中

学校...メタ認知の条件的知識を応用した批評読みへと展開する。

<参考文献>

鶴田清司・河野順子編(2023.9)『「根拠・理由・主張の3点セット」を活用した国語科授業づくり』(仮題)明治図書

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 古賀洋一	4. 巻 91
2. 論文標題 学校司書との「協働」経験を通じた教師の学び—探求的な国語科授業の構想に向けて—	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 古賀洋一	4. 巻 16
2. 論文標題 説明的文章の論証理解における修辭的表現への着目	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論叢 国語教育学	6. 最初と最後の頁 34-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古賀洋一	4. 巻 60
2. 論文標題 探究的な国語科授業の構想過程における図書館員との『協働』の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 島根県立大学松江キャンパス研究紀要	6. 最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古賀洋一	4. 巻 62
2. 論文標題 中学校国語科教科書における比べ読み単元の検討 説明的文章を対象として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 島根県立大学松江キャンパス研究紀要	6. 最初と最後の頁 35,45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣口知世	4. 巻 64
2. 論文標題 小学1年生による課題追究をめざした探究的話合いの様相	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	6. 最初と最後の頁 1, 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野順子	4. 巻 1257
2. 論文標題 「真正の学び」にせまる授業 真正の学びを生成する批評読みとその交流」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学付属小学校編『学校教育』	6. 最初と最後の頁 6, 13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野順子	4. 巻 265
2. 論文標題 読解力の育成20説明的文章の『批評読みとその交流』の指導法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 指導と評価	6. 最初と最後の頁 42, 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古賀洋一
2. 発表標題 学校司書との「協働」経験を通じた教師の学びー探求的な国語科授業の構想に向けてー
3. 学会等名 第140回全国大学国語教育学会オンライン大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古賀洋一
2. 発表標題 研究者による国語科実践研究の枠組みと意義の検討 - 説明的文章の読みの学習指導研究を例として
3. 学会等名 第141回全国大学国語教育学会オンライン大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 古賀洋一
2. 発表標題 国語科教師と学校司書との「高次の協働」形成要因に関する事例的研究
3. 学会等名 第18回中国北九州地区国語教育学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古賀洋一
2. 発表標題 探究的な国語科授業の構想過程における図書館員との『協働』の意義
3. 学会等名 中国北九州地区国語教育学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野順子
2. 発表標題 主体的・対話的で深い学びこう創ります！
3. 学会等名 日本国語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野順子
2. 発表標題 振り返りを重視した主体的・対話的で深い学びづくり
3. 学会等名 日本国語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河野順子
2. 発表標題 対話で深める「ごんぎつね」
3. 学会等名 「ごんぎつね」を学ぶ研究会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 廣口知世
2. 発表標題 「合意形成をめざす話し合いにおける折り合いのつけ方とその変容 - 小学2年生の授業実践をもとに -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 河野順子・岩崎淳・木下ひさし・中村敦雄・山室和也・坂本喜代子・宮前嘉則・樺山敏郎・丹生裕一・幸田国広・吉永安里・佐内信之・神部秀一・渡辺通子・稲井達也・大貫眞弘・阿部藤子・奥泉香・宮津大蔵・山下直	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 151
3. 書名 改訂版 言語活動中心 国語概説 - 小学校教師を目指す人のために -	



1. 著者名 古賀洋一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 205
3. 書名 新・教職課程演習第10巻 初等国語教育	

1. 著者名 古賀洋一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 235
3. 書名 新・教職課程演習第16巻	

1. 著者名 古賀洋一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 556
3. 書名 説明的文章の読解方略指導研究 - 条件的知識の育成に着目して -	

1. 著者名 河野順子・鶴田清司・古賀洋一・山元隆春・塚田泰彦・山元悦子・佐渡島沙織・奥泉香・難波博孝・吉田裕久・間瀬茂夫・羽田潤・植山俊宏・松本修・中西淳・山崎準一・甲斐雄一郎・長田友紀・松崎正治・中村敦夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 581
3. 書名 国語科教育学研究の成果と展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古賀 洋一  (KOGA YOUICHI)  (00805062)	島根県立大学・人間文化学部・准教授   (25201)	
研究分担者	廣口 知世  (HIROGUTI YOMOYO)  (30963376)	京都ノートルダム女子大学・現代人間学部・講師   (34312)	2022年度最終年からの参加。

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鶴田 清司  (TSURUDA SEIJI)  (30180061)	都留文科大学・教養学部・教授   (23501)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関